

---

# たった一言、君に言えない

志茂田のき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たつた一言、君に言えない

### 【NZコード】

N67820

### 【作者名】

志茂田のき

### 【あらすじ】

祐介がずっと片想いしていた相手は幼なじみの沙汰。流れで体を繋げてしまうけど、気持ちは伝えられないまま。そんなとき、二人の共通の友人辰生が何故かよく絡んでくるようになる。沙汰にべつたりな辰生にハラハラする祐介は…

君が好きで嬉しいんだ。たとえ君にやがてわらなべても（前書き）

見  
て  
い  
た  
い  
傍  
に  
い  
た  
い  
触  
つ  
て  
み  
た  
い

全部隠して  
友達のままで、満足だと  
思つてないとも思つてられない

君が好きで嬉しいんだ。たとえ君に云わられなくても

少し動けば素肌が触れ合ひ距離で向かい合ひクラスメイトは舌先に寝息を立てている。

どうしてこんな展開になつたのか、あまり覚えていない。きっと緊張と興奮でとんでもないことを言いだしてしまつたのだからね、今はそんなことどうだつてよかつた。

頬に影を落とす長い睫毛。つこわせまで重なりあつていた白くて華奢で小さな身体。

起いちゃないように注意を払いつつ、せりつと顔にかかる黒髪をつけてやりながら幸せを噛み締めた。

俺はこいつが大好きなんだ。

紅葉がよく映える晴天の日和なのに、祐介は憂鬱を隠せずため息をついた。

それもこれも自分が悪いのだけど、それは自分でも收拾がつかないくらい大きな過ちだった。

まさか本当にしてくれるなんて思わなかつたのだ。軽いノリで話を運んでみたらあまりにあつさりと手に入つてしまつた。ずっと欲しくて欲しくて堪らなかつたものは、向こうから笑顔で手を広げてきたのだ。

幸せで嬉しくてどうしようもない、はずなのに

肝心なことを言い損なつた。タイミングを逃した言葉はでるにでらくなくなつたものだから、未だ胸に渦巻いたまま以前となんら変わりはない。

「どうしてこうなるかな…」

自分の不甲斐なさにいい加減腹が立つ思いで、本田再び何回かのため息が零れた。

「祐くん、どうしたの？」

パチンと弾けたように意識は現実に引き戻される。

聞き慣れた声はすぐ真横から聞こえた。近づかれても気付かなくくらいに祐介は自分の世界に入り込んでいたのだ。

「沙汰…、なんでもないよ？」

笑つてみせたら、安心したように笑顔を返してくる。沙汰は先日のことなんてなかつたかのように今までと変わらず接してくるから、祐介もなんとなくあの日のことを掘り返すことをためらっていた。

沙汰の儂なげな少女めいた容姿と柔かな物腰は祐介だけじゃない、他のクラスメイトさえも引き付けて止まない存在だった。

男子ばかりのこの学校では、沙汰はあまりに危うい。

守つてやりたかった。のに  
自分で汚してしまった。

「祐くんやつぱり、今日は変だよ？」

心配そうな表情さえ愛しい。どうにかなってしまったやつになる。  
自制心がきくつちこ、早く  
早くこの気持ちを消してしまわないといけない。  
せめて友達に戻れるよう。

あんなことしても困った顔ひとつしない沙汰に、こんなにもやさきを  
きしている自分はさぞ滑稽なのだろうな、と祐介は自嘲気味に笑つて  
沙汰の頭をくしゃくしゃつと撫でた。

「最近憂鬱そうな顔してんな、祐介」

机を囲い昼食を取っている中で、辰生は訝しげに祐介の顔を覗きこんだ。

「え、あ、そうか？」

ぽんやりしていたせいか返事が遅れて狼狽える姿に、ますます辰生は顔をしかめて、うーんと唸る。

「うん、今にも飛び降りそうな感じ」

「え、祐くん死んじゃやだよ」

辰生の言葉に沙汰が慌てて祐介の腕を掴み揺さ振った。苦笑しながらその手をやんわりと押し戻して辰生を睨む。

「んなわけないだろ、なんでもねーっての」

おどけて笑って見せると、やれやれといったふうに辰生は食べ掛けの焼きそばパンにかじりつぶ。

そのまま沙汰が念を押すのに困ったように応える祐介をチラリと見やつて誰も聞こえない小さな声で呟いた。

「…やつむつ」と、ね

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6782o/>

---

たった一言、君に言えない

2010年11月8日18時13分発行